WASON
HQ
1104
J74

Nov. 10
1885
no. 8

驛遞局認可

明治十八年十一月十日發行

女學雜誌

第八號

東京萬春堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

松樹千年綠　常盤なる松も色そふ時を得て幾千代春の榮をか見ん　玉瀾

●女學雜誌第八號目次

宮内省達、華族女學校規則●婦女の責任●雜報數件●イーストレーキ夫人の講話●森文部省御用掛の示諭●食物のをゑし、曉時鳥、外一首、發句二首、詩一首○一賤婦の貴顯より愛を受し事、淸女の秀才和漢を貫く淸女捲簾の圖○女學雜誌第八號題詞、菊を見て感あり(今樣)、敷島の道、文を書く心得數件、をいらん狂歌○淨瑠璃の評、茶の湯の事、生花水揚の秘傳●八百屋お七の事、娶の噂の舍所、感心ある夫婦の話、北の方、御簾中、御新造、夜着のと●おの字の答、白拍子の問、女を入道と云ふ問●諸廣告數件

十一月十日

明治十八年間　女學雜誌發兌日表

月		
七月	廿日	
八月	十日	二十五日
九月	十日	二十五日
十月	十日	二十五日
十一月	十日	二十五日
十二月	十日	二十五日

廣告正價表

一行一回揭出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵稅共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し不得已者に限り郵便切手一割增にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表

冊數	正價	郵稅	合計
一冊	正價四錢	郵稅一錢	合計現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計前金壹圓卅錢

但し毎號十冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

女學雜誌第八號　（明治十八年十一月十日）

●宮内省達華族女學校規則　（前号のつゞき）

第三章　學年及び授業時間　第一條學年ハ九月一日に始り翌年七月卅一日に終る此間に於て一級の科定を完了せる者とす●第二條　毎日授業の始ハ日長短に隨ひ適宜之を前後すと雖も午前九時より後れざるを法とす●第三條　毎日授業の時數は小學科は五時間（土曜日ハ三時間）中學科ハ五時二十分間（土曜日ハ三時二十分間）とす但し臨時伸縮することあるべし●第四條　一學年中休業日左の如し、秋季皇靈祭、神嘗祭、天長節、新嘗祭、冬期休業（十二月廿五日より翌年一月十日まで）、孝明天皇祭、紀元節、春季皇靈祭神武天皇祭、夏季休業（八月一日より同く卅一日まで）、日曜日

第四章　試業式　第一條　試業ハ中小學科に具する所の課業の熟否を驗査する者にして小試業大試業の二種とす●第二條　小試業授業凡三四十日毎に特に問題を設て之を施し其の得點の多寡及び平常の功過勤惰を考へ生徒の席次を黜陟せる者にして一學年中五回之を施行す●第三條　大試業ハ中小學科俱に學年の終り毎に特に問題を設けて之を施し本學年中平生の功過勤惰を考へ一級科程の進否を判ずる者とす●第四條　試業の成績は點數と以て評定し各試業の定點ハ一百を以て最上とし零と以て最下とぞ●第五條　小試業の一學科成績點ハ其試問に應答の評點の一半とし該小試業期内平生の功績點を一半とす其法並に最上點と百と定め其得點を相和して二除し而して得るものとす●第六條　大試業の一學科成績點ハ其試問に應答の評點を一半とし該學年内の本學科小試業成績點の總和を一半とす其法並に最上點を百と定め其得點を相和して二除し而て之を得る者とす●第七條　小學科上等第一級の卒業に因りて小學全科

の卒業を認め中學科高等第一級の卒業に因りて中學全科の卒業を認むるものとす　（未了）

○婦女の責任

女は一生のうちに三從あり幼くしては親に從ひ人となりては夫に從ひ年老ひては子に從ひ無理と思ふ事にも親の命には反く可らず暴りのことと見ても夫に之逆ふ可らずいま〱しきことと云へども子をあなどる可らずたゞ何事にも優にやさしくして心のうちを温和にし雪を負ひて曲がる竹の如く風になびきてゆらめく柳の如くあらんと婦女の心得至極なりとは古し支那流の學風さかんなりし比ひの教にしてこの世を害し人を輕ろしめたると言語に絶へたり今の婦女は幸にも此の聖代に會ひ歐米自由の風の吹き來れる時代に生れて初めて人間正當の取扱をうけ其一個の婦女たる資格は何人と云へども暴りに侵す可らざる程の權力を得るに至れると我等の尤も慶賀する所ろ也然れども凡そ物事は極端より極端に走るの弊あるものなるが故に從來非常に婦女を輕蔑したるの風漸く止むと共に亦た非常に之を尊むの風習に行はれんとするの有樣あると吾人のまさに憂ふる所なり抑も婦女は決して男子の輕蔑を受けて一生を婢の如くなして送るべき筈の人間には非ず固より天賦の權を神より受けて其の恩に報ふべき義務は男子と均しく身に負ふ程の者なれば其の昔日の如き壓制を受くるの理なきは勿論なりと云へどもされバとて亦た暴りに之を尊敬して婦女の一顰一笑に直ちに事の正邪を判し其仲間の好惡は以て行の敬否を定むるに足るの如きの有樣となり男子は恰かも之に僕事し行くに其后ちに隨はざる可らず座するに其下に降らざる可らず言ふに其の氣げんを窺はざる可らず食ふに其の給仕人たらざる可らず若しも斯の如くならざるときは則ち之に思はれて禮義を知らざるもの人に不信切なるもの

と見做さるゝ如き有様とならんには此れ亦た一の弊を去りて更に別他の弊と新に生じたるに均し云所る暴を以て暴よのもるの次第にして決して真正の改革とも云ふ可らざる也吾人が日本の婦女に就て熱心に希望せる所の者は婦女が暴りに壓制せられし人類たるの幸福を受るあきを憂ひて之を改革し以て之をして真正の位地に至らしめんと欲するに在り之をして至らしむべき地位とは婦人の位置と題して前きに論弁したる通にして吾人の望む所は實に之に過ぎず然るを若し此の地位を超えて更よ一歩を過ごし前よ述ぶる如きの過弊に行かんことを希ふものあらむ吾人は之を悪しゝとして非難すると決して今の男子に向ひて女權の伸びんことを訴るの熱心に譲らず更ふ婦女に向ひて其の出過ぎなることを責難すべき也

歐米の婦人にして若し前述する如き過弊に至らんとも尚は不可なり況んや吾國の婦人の如く未だ教育を受けず未だ其の責任を盡さゞる者にして早く先づ如此くならんにも其の不可なるとも亦た言ふを待たざる也凡そ權力ある所ろにも必ず責任あるものあらざる可らず例へば一個の人民たる權力あらんと欲せば租税を拂ふと云へる義務を盡さゞる可らず一家の主人と云へる權力あらんと欲せば家族を養ふと云へる義務を盡さゞる可らず世の万事皆あ然り此の故に今ま婦女にして若し婦女たる丈けの正當の地位よ至らんとするには亦た其れ丈ケの義務を盡さゞる可らざる也

之を略言すれば夫を助けて夫の為さんと欲する所を為さしめ其の憂を消し其の樂を増し後よ顧慮せしむる所なくして敢て外に全力を盡さしむるは婦妻たるものゝ義務なり一家を司理して出入の會計を掌どり食物衣服の事を取扱ひて餓と寒との患へなからしむるべきは婦妻たるものゝ義務なり生みたる所の子女

を育だてゝ之を教へ其の德性を養ひ其品行を脩め敢へて邪道に迷ハしめざらしむるは婦妻たるものゝ義務あり此故ニ政治經濟學の一斑より生理理化學の大体と教育に切要なる諸學科とハ十分ニ心得置かざる可らず如此き教育を其の身自らに受けて且つ如此き義務をよく盡し行ふに非らずんバ決して婦女たるものゝ爲すべき所を爲したるニ非ず其の爲すべき所を爲さずして如何で其の至るべき地位をうくるに足るべけんや

顧みて我國現今の婦女ヲ見るに如此き教育を受けたるもの及び如此き義務をよく盡すものなし或ハ之れあるべしと云へども是れ二千万人中の百千人ニ過ぎざる也それ其の力其の行ひ未ダ決して一個の婦女たるものゝ有すべき所にだも及バざるに世はすでニ之を優待して早くも歐米の美風を用ひ以て之をして婦女たるものゝ至るべき地位に至らしめんとす是れ實に今の婦女の大に感謝すべき所ろにして言へバ身に價値なくして既ニ其の報を受けたるものと云ふべし然るに何等の不心得人ぞ此の優待をよき事にして更に一歩を上ニ進し彼の歐米に於てだも尚は過弊とすべき所ニ登らんことを希ひて女は男を使ふべきものなりと妄想し早くも驕然としてその夫ニ服從すべき心得を失ふに至るものあらんとは思ふニ如此きハもと婦女たるものゝ正當の地位を越へて行き過ぎたりとの責を受くべきのみならず此れよりして余の婦女を導きて眞正の地位に至らしめんとする改革者の熱心をして徒事をなさしむる罪ありと云ふべし吾人は如此き者と尤も嚴しく筆誅してかの極端より極端にうつるの弊を未ダ盛んならざるに防ぎ今の婦女改革が所云る暴を以て暴に代るが如き有樣とならざる樣に盡力せざる可らざる也

●婦人慈善會　同會ではよく〳〵來る十九、二十、廿一

の三日間午前十時より午後五時まで内山下町の鹿鳴館に於て開設せらるゝよし巨細は廣告にもある通りなれバ有志のお方ハ當日御入場出品御購求ありて慈善を補助せられ給へ尙は現場の景況ハ次号へ圖入附錄として詳しく御報道致します

●神戸婦人慈善會　又神戸にても兼て婦人達が相談して慈善を旨とする一會を設立され代言人品川政瀛氏の妻女ゆか子を會長に撰擧しその事務を主宰せしめられしところ此程會長更撰期となりしゆゑ數十名の會員即ハち婦人が會合投票せしところ前會長ゆか子が再撰せられ引きつゞきて議事を開き會員は各自力めて貧困者を取調その旨を會長に報告し會長の差圖を待ちてこれに金圓又は物品を惠贈すると經濟を守り品行を正しくする人にあらざれバ會員に加へるを得ざると等の數項を議決せし後猶は會長ゆか子の發議にて當今不敬罪を以つて大坂の獄中に繫がれ居る舊文明雜誌編輯長門野叉瀛氏の家族が貧困に迫り朝夕の烟さへ立かぬるの哀れ果敢なき情狀を救ふが爲め金若干圓を惠贈すべしとのことに何れも贊成を表せしより直に同會から金五圓の送達方をなして退散せられし由なり

●日本衣服改良會　日本衣服を改良するは今日の急務なれども唯これを論ずるのみにて躬行する人の少なき憫笑するに尙不餘りあり吾れこそ先登第一して東京の因循諸子を愧死せしむべしとて埼玉縣南埼玉郡大澤町越ヶ谷驛地方の有志者が日本衣服改良會と稱するものを設立して目下會員を募集中のよし（明治十八年十月卅一日時事新報）

●女武者修行　新潟縣下越後國長岡本町梅田吉衛氏の惣領娘よし子は身の丈五尺七寸五分あり齡ひ未だ廿の上を越さねど目方五十貫までは石にても米俵にても雪なす腕きッとさしのべいて輕々しく持ゆく程

なれバ見る人皆な舌を巻きて畏れあへり然るによし子ハ心バへも亦た飽まで逞しく幼きより武藝を好み十二才の頃ろ長岡藩の師範堀口某の門に入り長刀の指南を受けて免許を得たるが此ほど或人の勸めにより武者修行を思ひ立ち福井滋賀岐阜長野の諸國を廻りて後に出京し山岡鉄舟居士の許を訪はんと志ざし居るとぞ是亦た一個の女丈夫と云ふべし

●五ッ子　英領印度のミーツルの内なるミンゲリといふ所に住めるチヱチイと云へる者の妻が此程分娩せしに一產に五人の子を生みたり其中三人ハ男子にして二人ハ女子なり然るに同婦人ハ二年前にも四ッ子を產んで良人に呈し尚ほ其前年には三ッ子を產みし事ありされば此度の五ッ子も年々に其數を增し來りたる者と思はるゝなり（本年十月廿四日ジヤパンメール）

●イーストレーキ夫人の講話　去二十四日明治女學校に於て同夫人の講話ハ事物觀察の利益に關して讀書ハ智を得るの階梯なることを陳べられたる有益る者なれど其大意を抄譯して左に掲ぐ

年少き婦人諸子よ余ハ今日限りある時間に長き物語りを爲すべくもあらず」余ハ此席に臨む每に婦人諸子の身を圍り繞る事物に注意を引起し活潑なる心智と自然力に感ずるの氣象とを生じて生活の最も高き樂を受んことを冀望參らするなり」學校にて讀む書物ハ高度の智識を求むる爲めの階段踏石の如き者なり之に反して御身等の身休を圍り繞れる最も普通の事物に注意して其理如何を問ひ考ふる時ハ此間に驚くべき美妙なる者あるを發見すること甚だ多かるべし」御身等が靴下等を編むに當り此毛絲ハ何れより生じたる乎編針ハ何物なる乎如何にして種々の色ハ生ぜらるゝや何の故に世界に種々の色あるやと考ふべし」又今日の如く雨降る時ハ雨の原因ハ何なるや風

吹く時ハ其原因ハ何なるや又二十四時間毎に日夜を爲すハ何によりて此變化あるを考へよ呼吸する時に眼に見る能ハず而も生活へる爲めにハ是非とも無かる可らざる一種の奇物ハ何物なりやと考へよ水を飲む時ハ水ハ何物より組み立らるゝや吾等が浴みし又飲用うる奇妙なる流動物ハ何なるや此の如く事々物々に注意けて問ひ考ふる事と名附けて身を圍り繞る萬物を觀察へるとハ云ふなり是れ實に造物者が人類を此驚くべき事物の間に置き人をして日常之を見せしめ毎日同一の狀を示す者なり我々ハ無感觸にて此間ょ生活ふべきに非ず」自然の事物に就きて造物者の意思を尋ぬるとし人類特有の天性にして草木ハ之を爲す能ハず地に立て成長し地球を裝飾るハ其の職分なり禽鳥や蝶や多數の虫類ハ造物者の心を解して人類と伍ぶことも能はずして唯飛鳴歡喜て後に死するに過ぎず獸類畜類ハ自然の法則に從がふも造物者の與ふる利益を受くる能はず之を理會とり之と欣喜るハ唯人類のみ」御身等ハ嘗て火鉢の上に在りて熱湯の釜を見るべし又其の沸騰る時ハ釜の蓋揚りて蒸氣の發するを見ん是れ果して注意する程の事に非ずと思はん然れ共嘗て一少年あり此少年ハ身躰羸弱して學校に行く能ハざりしが此の蒸氣を見て注意したるが爲めに自然の力を此中に發見したり其齡十四年の時蒸氣を見て匕と之に當て匕中に水の溜まるを見たり此注意によりて研究の後遂に蒸氣機關を發明したり是れ百年以前の事なり此發明によりて百年後の今日ハ百事面目を改めたり其原ハ唯注意深き少年が茶釜の蒸氣を見しによれり」諸子よ天氣晴朗の日にハ雨なく黑雲集れば雨あり是れ日光地上の水を温めて此温められたる輕き水氣騰ると蒸氣の如く再び降りて雨を爲すなり是れロツトが匕上ょ溜めたる水の如し」此世界にハ注意あり才智ある人民多し造物者

ハ諸種の力を事物に與へて其研究を助けり予ハ此學校に於て有益の事を告ぐ諸子其才智を伸べんとせバ注意して小事をも偶然に見過すヿ勿れ此の如くなれバ日々ニ美麗有要たる事理を其中に發見すヿあるべきなり云々

●森文部省御用掛の示諭（前号のつゞき）

該學校重立たる職員に示諭せられたる要領

今回兩師範學校を合併あるに付てハ過日校長ニ宛一書を出だし置きたり是れ諸子の已に知る所ならん今復更らに一言すべきあり抑今回改革の基礎たる要点は敎員養成の事をして益完全ならしめんとの趣旨ニ在り尤も此迄も此の事に從ひたる諸子は善く盡力せられしと疑ひなし然れども事物の改良は定限なきものにして其方法一にして足らず愈々益々改良を謀り須臾も油斷すべからず諸子善く此点に注目して一意改良に從事すべし今其要点を擧ぐれバ（第一）重立たる者深切に意を用るヿ（第二）時間を最も利益ある樣に使用するヿ（第三）金を最も鋭く使用するヿ以上三箇の要点を常ニ事業の基礎とするときハ敎授の事あり試驗の事あり取締上の事なり又會計上の事なり其他何事に關しても其捗を立つるに易くして其方向に迷ふヿなかるべし抑此師範學校は政府の爲めに謀りても大切なるものなれども全國一般の爲めに謀りては猶一層大切にして殆ど他の敎育の事務中此の學校に比すべきものなしと言て可ならん云々

又今度の改革ニ付て或ハ此の校を盛大にするとか或ハ之を擴張するとか云ふ如き念は毫も有すべからず唯々事業を良くするヿ即可成的改良するヿの念は瞬時も之を忘るべからず唯々事業を良くするヿ即可成的改良するヿの念ハ瞬時も之を忘るべからざるなり世間或は種々の評をなすものある

べしと雖ども此の校の重立ちる者の如きも漫に擴張或は盛大云々の言を唱ふると決してあるべからず

○食物のもなし　　三筋町　砂微仙窟主人

食物は人命につゐて最も關係深くして一日も欠くべからざるものあるが此食物の調理等は先概して女子の受持なり殊に中等以上にして躬らは其扱ひを爲さぬ迄も之を管理して指揮するは亦女子の務めの一にして之を打捨るときは此上もなき不經濟に至り爲に一家の不取締を生ずるものなり故に自ら取扱ふ女子に在りては殊更に注意して浪費を省き同じ入用にして人に適ふる樣の工夫こそ望ましけれ是等の小事に至りては日々の菜を成るべく同じからぬ樣に心を用ひ誰彼となく時としては好めるものを嗜む事を樂しむの意を彼方に汲み取るを大事とし又食物に自然の極り有ることと即ち漢士の料理法にも羹汁を先にし我國にても先吸物を出だし西洋にても先にソップよりし僧侶の齋非時にも供養の一は汁なりといふを思ひ合すれば人間は何れの國にても汁羹の類を先にするは各國自然に極れるものと知る杯は自らの研究によりて容易に胸に浮ぶものあり斯る事よりして今日若し老人輩が章魚鮑等を柔かに煮て欲しと望まばサンザシ(藥品)か或ひは栗の皮にて煮るを覺え居り又熱きトロヽ汁をと望まるれば芋と共に勝栗をすり込みて火にかけ之を供すれば氣に叶ふが如きは些細の事なるが是とて常に注意せざれば知るによしなし舊幕のころ兩國に林屋となん呼べる船宿あり主人は常に留守勝なりしかば夫等を知りてや賊の忍び入り金銀其他を奪ひて失たるのち主人は我妻を疑がひて此盜難の爲に風波を生じ妻を里方へ退遣けり斯る內幕なれば老母は痛く心配なし居る處へ顏知らぬ客人入り來り其方は此家の老母なるか豫て聞く其方はカツヤ

の香の物を調理する名人なりと我是迄割烹店毎に登りてカクヤの香の物を注文しけれど口に適したる事一度もなし老母若し我口に適ふカクヤの香の物を調理するならば褒美は望みに任すべしと再三再四の望みなれば老母は兩手をつかへ甚だ未熟には侍れど若き頃より香の物の漬方等に心を碎き常々お客方へ御散財させまじと思ふ心より香の物を肴に替ては呈せしなり乞ふカクヤは程なく參らすべければ先此老母が香の物につきて心を用ふると否とを失禮なれども勝手へ越されて其漬物の樣子を御覽下されよくと二夕重の腰して先へ立ち案内されたる客人は是ぞ思ひの外なりと立て勝手に赴きたり　（以下次号）

○晩時鳥　　常陽　板橋　歌子

月影は入さの山のほとゝぎす
　なきてはるかにとふざかりゆく

○時雨晴陰　　伊豫　町田　讓

浮雲のこゝろもそらにまよふらし
　それぬと見れはまたそゝくるゝ　　東京　濱野　よね

○

そら豆の二葉をつゝむ落葉かな　　遠陽　柴田　壽山

○

生餌はむ目配すこし霜の鳥

○觀音寺山春望　　東京　石原　とみ

東風三月夕陽天。一帶青山遠罩烟。白里濱頭放眸處。歸帆出沒碧波連。

評　風景如見。令人神往其間。

○一賤婦の貴顯より愛を受し事

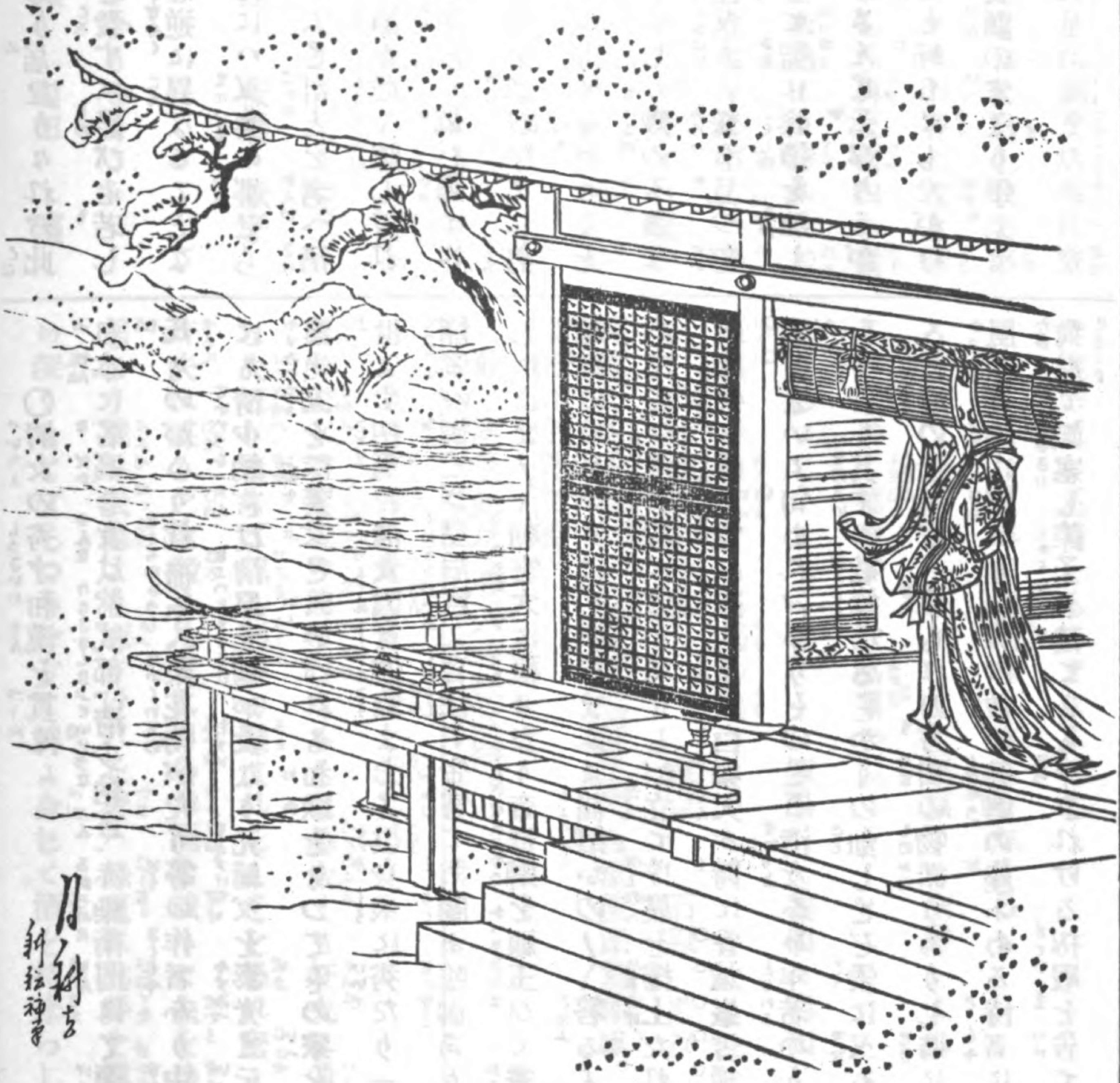
周の主父が妻夫の他に行けるとき心太くも奸夫に通じ夫皈り來らば忽ち惡事の顯はれんことを恐れ密に奸夫に謀り之を殺さんとし自ら毒酒を設けて夫を待居たり或日夫他より皈りけれど妻は殊更に其勞を慰め深くもてなしつゝやがて婢に命じて酒を持來らし

ひ然るに婢ハ疾くに妻が惡意を知り居たりけれバ此毒酒を持出で、まのあたり主人を殺すに忍びず若し之を行ふときハ其不義たる妻が惡逆に異なることなし然りとて此奸曲を發露したらんにハ又妻の罪せられんことを憐み種々煩らひ居しがふと計とを考へ酒を持出るとき誤て躓きたる体にて酒を悉く流しければ主人大に怒て婢を笞ちけるに妻謂らく彼れ痛さに堪かね若し我が惡事を告發せんことを恐れ序でに打殺さんと思ひ共に之を打擲き稍くにして命バかりを助けて日を經る程に主父が弟ハいつしか嫂の不義なるを聞き密に主父に告げされば主父大に驚き且つ怒り遂に其妻を殺したり奴婢を招きて將に毒酒を流したる忠節を賞し今日より我妻となさんと云ひけるが婢ハ其事の禮に違ふを以て固く之を辞してしたがハざりしが此事四方に聞へければ貴顯の家より爭ふて此婢を求めんことを望みしとなん

○清女の秀才和漢を貫く

日本に名高き女は紫式部、清少納言、赤染衛門にて源氏ものがたり枕冊子、榮花物がたり等の作者なり中にも清少納言は清原元輔が女なり元輔父を泰光と云泰光父を深養父と云いづれも和歌をもつてその家を世になす故又た清女天資俊爽にして其身衆に秀たり一條帝の御とき皇后宮に官仕す帝嘗て紫閣に臨御ありしにたま／＼朝雪大に積りたり帝群卿を顧玉ひて香爐峯の雪はいかにとのたまふに諸卿おの／＼答るところなし清女傍に侍りたりしが立て御簾を捲上たればバ帝大に感じ悅び玉ふ是は白樂天が詩に香爐峯雪撥簾看といふ句あればなりそのとき清女なほ年若かりし時なり其才の敏捷なるとかくの如しとぞ爰に又なる公卿の近衛家へ來られ四方山の物語りありし時に風殊の外に寒かりしかバ彼の公卿の座にある侍者に向ひて風寒し障子を建てよと申されける折暇を告て

戻られける跡にて近衛殿侍者ゟ申されけるは扨〳〵あの公卿ハ不才なるものあり風寒し障子をとあらバ建よと言はずとも立べき心と知れたるゟ建とまでに申しさるとさりとは念の入り過さる口上なり餘情さらになし彼卿歌の下手なるとてとまりなる哉と嘲せられしとぞ清女が風情とは天淵の違なりされバ或人の發句に「両國のむしにてきくやほとゝぎす」といへる句の端書に両國の橋の上にて時鳥聞はべりてと書きたりし趣と一般なるかをかし



○女學雜誌第八號題詞　磐城　明日香小史

百貨備はる波斯の市。珠璫集まる崑崙の。山ならなくに近藤の。君のものせる此雑誌は。洋の東西更にも云はさ。時に古今の差別なく。片句隻章一事一業。女子に益あり利あるもの。千百載て漏らさなく。億万集めて皆舍てず。専ら婦女子の改良に。心つくしの西の果。根室千島の東まで。到り到らぬ里もなし。時務知る人と謂つべし。婦女子は論なし日本の。女子改良ある心ある。四方の君子よ此雑誌に。資りなば益や多からん。篇を累ねて今玆よ。第八篇の發行を。喜ぶまゝに筆とりて。思ふ一トツを記るのみ

○菊をみて感あり（今様）　明治女學校　ゆりの

「秋のすゝ野に　きのふまで
錦かざりし　とききちかう
野分のかぜよ　吹ちりて
はかなき跡を　のこしたり
「露のまがきに　きらく＼と
あかねいろなす　菊の花
八重かさなりて　今をしも
さきのさかりと　人やみん
「うつろふさなれ　いかならん
まらねど人は　おのがじゝ
ちゞにおもひを　ことにして
こゝろの色を　うつし見る
「雲井の庭よ　さきにほふ
盛りひさしき　白菊は
そらにかゞやく　久かたの
天つ星とぞ　あやまたん
「うつりかはれる　世の中の
春秋しらぬ　菊潭に
ながれを汲て　住む人は
よはひのぶてふ　こともあり

「東籬の秋に　菊をつみ
山のけしきに　こゝろやり
世にそむきたる　そのあとぞ
今なほ慕ふ　人もあり
「世をもさけまし　我はしも
雲の上にも　望みなし
また百とせの　よはひをも
かぞへたのしむ　身にあらず
「ちぐさの花の　とぢめなる
きくの一もと　霜をへて
香りも高き　晩節の
まめなるすがた　なつかしや

○敷島の道

わが國の歌を敷島の道といふと上古には聞えど後代の詞なりしき島は日本の惣名なり道は人倫の道なり人倫の道は聖人の教の法なり應神天皇の御代始めて聖人の道渡り來て以來代々の天皇聖人の道を本として我國の風俗に隨ひて斟酌して天下國家を治むる法を立て律令格式等をさだめ賜ひしをこそしき島の道とはいふべけれ神武天皇東征を始め代々の天皇天下國家を治むるに心を勞し賜へり君臣ともにうかうかと歌ばかりよみて居らればとて治まるべき道理なし歌を敷島の道といふは歌人の私言なりといへりこの一條の論げにさることながらもと吾邦の風俗は武勇に勝れたればめゝしき歌などを丈夫のよみ出べきとかは男子は男子婦女は婦女らしくわが持まへを吟詠することこそ眞心あるべけれ文物さかんなればその弊浮華にあり行き和歌の風體もおのづから淫靡にのみながるゝをたとへていはゞ聖教は仰ぐべけれども後學の者に僻說いと多し佛說も尊とけれど末世の僧徒に破戒ある如く歌道も名人君子にはなきとなきど歌にすさむとも亦なきにあらざなげくべし因に云もとしき

島といふハ大和國の地名にて欽明天皇のみよに都したまふところなれバしき島をもて大和の枕詞とハしたるなり萬葉集人麿が歌に見えたりかゝれバ後拾遺集に敷島の大和歌といふとありまたそれより轉じては和歌のことをやがてしき島の道ともいへるありこれは枕詞をもてすぐにそのことにいへる例ありおしてるを難波の如くして難波宮をおしてるの宮ともいひあしびきを山のこととしてあし引の嵐などいふ類なり猶くハしきことは石上私淑言に見えたり

〇文を書く心得　（前号の接き）

一 文は其程より少し敬ひて詞のつゞきふつゝかならぬ樣にしたゝむべし然れども餘り尊敬すまじき方へ慇懃過たるも諛ひあり清少納言が詞にもさるまじき人のもとにあまりかしこまりたるも實にわろきなりといへり又た文詞を押柄に書なしたるは人の惡みを蒙むり恨みを受るもの也さるゆゑ文とバなめき人こそいとゞにくけれと清女ハいへり但ゞ我身の分限をしらんこと肝要なり

一 一切の事に付て人のなせし事をあざけり笑ふまじきことなり或る局方より同じ局のもとへ月見せんとてつかハしたる文に月の匂といふ事を書きたり是を數多の局打より花にこそ匂ひハあれ月に匂ひの有ものかハといひて大きにあざけり笑ひけるを主人聞賜ひて心あてに思ひし峯の雲遠くわたりも今は匂ふ月かなといふ古歌あり月の匂ひとて光の餘るをいふなりしからバ月の匂ひといふ事何ぞ僻事あらんとて大に耻しめ賜ふとなり

一 人のもとより文を得て返事せんにハ先の文句を取て其儘に書んハつたなきに似たるべし先より怪からぬ照續きとあらば殊更の暑とも一しほの暑ともたゞならぬ暑常ならぬ暑などゝ言葉をかへて書くべし先より堪のねとあらば凌かねとも忍びのねと

も詞を替ゆべきなり　（まだある）

○ていかい狂歌

西山宗因江戸旅宿の折あらある人此頃ていかいし侍るとて添削を宗因に頼ける

　うへをしたへねいとう山のはな見かな

宗因曰く面白けれど連歌めきたり箇様にてよろしかるべしとて

　花見衆やえいとう〳〵東叡山

即時に引直して扨脇をし侍らむとて

　霞ひく〳〵ひくゝるまざら

また何人の狂歌あるか下手浄瑠璃をきゝて五色によそねて讀る

　まづ青ひ素人浄瑠璃黒めんと
　赤き顔して黄なる聲出す

○浄瑠璃の評

南畝翁記に酒顛童子の忌日は八月十日なり大江山千丈が嶽の由來縁起に見えたり童子ハもと越後のものにて叡山に上り兒となりしよし甲陽軍鑑にもしるせり今も越後に童子屋敷といふあり近松が酒顛童子枕言葉といへる淨るり本に童子が母の童子を愛して成長にいたるまで乳をのませしゆゑつひに人の肉を食ひしといふ述懐の段あそれに聞ゆ西鶴が小夜あらしに閻魔王の地獄を落るさまもまたあハれなり名人のかけるものハかゝるあらくれたるものをものあそれに見することと筆力の妙あり吾妻浄瑠璃の清玄がさま〴〵の虫らを護摩の火にくべて祈りしがされどもしるしのあらざればたちうせんとして立たりけるかの清玄がこゝろのうちあハれともなか〳〵申すばかりなかりけりとかけり今の世の下手作者がかきなばあハれとハいはずしておそろしとかくべし悪人といへども戀の泌ハ一ツありあはれとかける文まとふその情をつくせるといふべし　（未了）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○茶の湯の事　　下谷　清草庵

茶の湯の始原ハ弘仁年中嵯峨天皇の御宇挽茶の節會ありてより以來この道世々に傳はり後ち足利八代の將軍義政公の時に至り珠光相阿彌等に仰せて眞の臺子の茶禮式を改められし其式尤もおごそかなり其後ち天正年中信長秀吉両公の世に利休草庵茶の湯の式を設けてより專ら世上に行はれて遂に明治の今日に至るまで其式を存せらるゝとなれり然れども茶の湯を云へバ風流隱者の玩弄物の如く思ひ去りて此道眞に貴き所以を知らざる者多きは歎かはしきことなり抑も〳〵茶の湯の道とは主に交際禮和を要とし親睦を旨とすると故人々その分に應じて器物飲食徒らに美を好まず有り合ふものども取り集めて相互に禮を厚うし人に貧富貴賤の差別あれども其隔てなく和たつ海の深き心の實を盡し各々家の業務の閑を得て心あるたる朋友誰彼とうちつどひ古今の物語りなぞしつゝ此道を行ひ樂しまば夏の日の暑さも冬の夜の寒さも打忘れつゝ交際益す〳〵密にして眞に茶の湯の數寄者とも謂はるべけれ利休の歌に　茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝのむばかりなることをいふなり

○生花水揚の秘傳

●牡丹　湯をもつて生べし　●芍藥　同じ

●萩　同じ　●秋海棠　竹の器を忌む外のうつはに入れ湯にて養ひ後ちに竹器に入れべし

●朝顏　日陰に生じたるは保たずぬるき湯にて生くべし　●水葵　同じ　●河骨　日向に生じて色黒みたるをとりびでにて莖より葉先まで通し山椒と上茶を煮詰めたる汁を口にても道具にても吹込め生ければ能く保つなり又石灰を沸し吹込でもよし　●木槿　あつき湯をもつて生けべし

●蓮　同じ　●夏菊　根のあたり節込て水を揚兼たるものあり生んと思ふ前に根をかみ割てあ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つき湯に暫時つけおき生けれバ水を揚るなり

●梅嫌●南天　此の二品いづれも矯んとするに枝折れやすし湯へ暫らくひたして矯べし其外の木の類も斯の如くしてよし

●竹　冬は葉へ砂糖水を吹かけべし夏は蠅其外虫たかる故葉へ篤と水をかけ鹽をかけ生れバ葉萎まず先づ竹を生んと思はゞ去年立の竹生んと思ふ葉計りを殘し根の方を三節ほど焼込バよく保つなり

草木とも毒のあるもの又ハ枝葉面白くとも名の知れざる草木は生花にすべからず只ゞ獨樂に挿すならバ其人の勝手たるべし

○八百屋お七の事

世人の口碑に傳ふる八百屋お七が事實は流布の書には江戸著聞集に見えたりその中にいへる湯島の天滿宮へ松竹梅の額をかのお七が自ら書きて奉納したりと世に云傳ふれどその實は谷中感應寺ある祖師堂に常在靈鷲山法華宗第一と云額をお七が十一歳の時書て延寶四年辰春二月と落款に年月をしるしたるを傳へ誤りしなりさて罪を得しは十六歳の時のことにて天和二年戌二月なり葬所も駒込吉祥寺なるよしお世にいへどこれも實ハ小石川指谷町なる天台宗にて南縁山圓乘寺といふ寺なりお七が法名は秋月妙榮（天和二戌三月廿九日）と石碑に彫てあり天和笑委集といふ天和年間の江戸大火をしるしたる書にて十三卷ありその書の卷尾三卷には八百屋お七の事のみを詳かにしるしたり此書は當時の記錄なれバさだめて實に近かるべしこのお七が事ハはやく淨るりに作りて歌舞妓狂言にもせしからに兒女までの話柄となれることぞありぬる予が幼なかりし頃はからくりにて七がことをうたひながら見せるとのいたく行はれて兒童の口すさみにもかの唄をまねたることなりしが今にその名ごりありて街にはをりくはお七がからくりを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見るとありかのからくりのいひ立にうたふ唄の濫觴をおもふにふるき小唄をあつめし松の葉の類に松竹梅と云冊子ありその中に載する涼の唄の文句に八百屋の娘お七こそ戀ぢのやみのくらがりによしなきとをしいだして罪は死ざいにきはまりてといふと見ゆさりかゝればこれらをやもとゝして作りまうけたるものならんか

○婆の噂の舍所

六わみだ婆の噂の捨て處といへる川柳點の句あり近き頃ろ彼岸中に六阿彌陀へ參詣せし道すがら老婆三四人連にておの〳〵婆の噂よしあし取々に罵りありく川柳點は實にもと心に感じたれど餘り憎氣あるゆゑ予老婆に向ひて扨いづれもはけふ後生參り罪はろぼしのために出たるならん處を斯く婆の噂を念佛に換らるゝはかへつて罪深かるべし殊には嗔恚をもやし身の養生にも惡しかりなんけふぞかりは曲て心ゆるかに參詣あれと申ければ老婆共聊か受がはずして曰くいや〳〵左樣の事にはいはず吾々と宿許にて申度とは數々なれどそれをこらへて口に出さぬ故にはつとても胸ふさがり居るありけふは彼岸の功德なるまゝむねに溜置るを晴さん爲にかくは語り合ひ事なり是また阿彌陀の御影なりと存ぜれぞ罪亡しならんとてます〳〵噂して止まぞ是等は柄をすげたる理屈かたましき事そふじて婦人の心根みあのゝる趣なるは淺まし

○感心なる夫婦の話

昔し堺に夫婦住の貧しき商人ありけるが夫婦とも古今まれなる職分にかせぎける故に廿年ばかりの間に大商人となり富榮ゑ手代も多く仕ひゐるしかるにこの妻何方へゆくとても元まづしきときの衣類にて風儀をかへぞ質素なりけるゆゑにあるとき夫の申けるは汝むかしも今も質素にして同じ風義つね〳〵感心

なりしかりといへども今はむかしとは身体も違ふとなり殊に女は衣服をたのしみとするものなれば何にても望の品はなしやへ申さるべしといふ妻答へて曰ふおそれながら天子將軍より各々の身分の位を見ればつゞれを着ても身お過候へども女のくせにて人のよき衣服を見ればほしきが病にて候まゝ私も見るほどのごときものは早速こしらへ置候へども着まする ことは冥加をぞんじて着ませぬなりと申さるゝに夫あきれてさやうないつの間にこしらへられしと申さ れければ妻の曰く今朝も門を通る女中の衣服を見てうらやましく候まゝ早速に先刻も二ッ三ッこしらへ候へどもいづれの衣類も着ることは我分をれおもひおそれて一ッも着はいたさじこしらへし衣類を御覧下さるべしとて簞笥の引出しあけられければ緋どんす緋さや天鵞絨毛織其外さま〳〵の呉服衣裳がみなみな書付にてこしらへありし故夫も甘心感儀して妻が德を賞せしとかやこれ等は誠に足るをしり儉約を守り身のほどを知りし人にてまことに長者大豪家とも女ながらもなる人は格別なるぞかし

○北の方　御簾中　御新造

貴人の妻を北の方とも北の政所とも云ふと男は陽也女は陰也南は陽也北は陰也表は陽也奥は陰也女は奥に引こもり居て内所の諸事を取計らふ故北の方とも北の政所とも云ふなり政所は諸事を取計ふ役所を云ふ也又た貴人の妻を御簾中と云は常に御簾の中に居玉ひ表向へ出て人に見へ玉はぬ心なり但し簾中と稱はるゝ古書には見ざるとあり又た人の妻を御新造と云ふと婚禮の前に其妻の居所を新しく造る故なるらしくつくると書てしんぞうと云なり

○夜着のこと

夜着は慶長元和のころより專らなすと云ひむかしは小袮卷とて常の衣服のすこし大なるを下にきてその

うへにふとんをかけて上ツ方もこれをめしたり連歌四季寄冬の部にふとんトありて夜着ハなし俳諧御傘のころハもハや有つれども古法を専りて貞徳老人も夜着を冬の季にせざるなり（近代世事談）

●おの字の答（十二）女の名におの字をつくると昔より有りしとあり太平記第廿二の巻ニ「菊亭殿に御妻とてみめかたち類なく其品いやしからでなまめきたる女房ありけり（中畧）おさいの局へめされて云々是を以て尊氏公の時代ニもおさいなど〻云女の名ありしとを知るべし然し何故に女の名におの字を付けるかハ未だ知らず（東京、長谷川しま子）

●白拍子の問（二十）白拍子とハ今の藝妓の如き者か將た娼妓の類か又た何れの時代より有るものか御教示あらんとを乞ふ（伊勢、橋口案山子）

●入道の問（二十一）女を入道と云ふと或書ニ見えたり入道とハ男のみ云ふニ限らざるものか如何（信濃、石村榮女）

文學叢誌 一冊郵税共六錢十冊前金同五拾六錢毎月貳回發行見本六錢封入

第貳號目錄○文章の本位を論ず○作文金言拾一章○文章と作るも難く讀むも易からず、作文改潤秘法○文の体格法の辨、柳子厚作文秘訣、文章の六節、文章の四要、文章を以て花ニ比す、古今文章の奇を擅にする者六家、四子文評、文を看る法○譯文ハ宜く意を用うべし（二）○新聞記者詩歌文集、福地澤田栗本大内岡本草間福澤山田等の諸先生○小説、人肉質入裁判○助詞の用法、古字今字の辨、正字俗字の辨、同訓二字疊用の辨○高京明備忘錄抄拾五件、文藝共に厚く心を用うるを要す、讀書の秘訣數件○速記術の便法○假名會の記事○新文學七外數件○諸報告數件○十一月八日發行○多少御入金ある間は御注文あるも發送不仕候但し可相成十冊以上の前金に相願度十冊以下にては一切割引不仕候

發行所 東京芝區櫻川町八番地 **萬春堂**

○**初學詠歌俳添削** 潤筆料隨意○郵券不苦○返稿三日間但三回或金貳拾錢以上潤筆料遞之雅君者小子編輯之類題花月集一部郵税以貴弁進呈
常陸國河內郡柴崎村 花月舘長 平井慶藏

近藤賢三編撰
○**神童詩文** 正價郵税共拾五錢 當分之內減價八錢
此集ハ我國神童の詩文を編輯批評せし者ニて出板以來既ニ數千部を賣盡せり今回謝意を表する爲め當分の間前記の減價を以て御注文に應ず請ふ續々購讀あれ
東京芝櫻川町八番地 萬春堂書房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大鳥圭介君題字　津田仙君序　近藤賢三著

○癈物利用

一冊郵税共五拾五錢　一名すたれ物用ひ方　既刻

無用の物を變じて有用の品となし巨萬の富を得る河村瑞軒ハ云ふ一度び眼を開けバ路上の塵芥皆な黄金なりと思ふに世間尚ほ用うべきの癈物甚だ多し徒らに之を癈棄して不景氣を歎ずるハ寶の山を傍觀して手を空ふするか如し著者之に慨ゑ多年如此き癈物の利用法を究め且つ博く西洋諸國ょ行むるゝ製造の秘法を採り漸く新法八十餘條を得平易の文を以て此書を編集したり何人にても此方法を實行して無用の品を有用の途に利用せバ國の富を増し家の益を興す實に難きぁ非ぞ

大賣捌　東京芝櫻川町　萬春堂書房

近藤賢三編輯

○農文温故

一部正價郵税共金拾錢　第一巻既刻

此書は隨筆雜書叢書等の中に埋れて世人の爲に普く知れざる有益奇珍の農文を集録せる者なり我國古昔の儒者ハ皆な農事を重んぜるが故に其の經詩を説く間に往々農文に關する至益の論議あり日本農術の知己たる者は決して之を棄つ可らざる也

賣捌　東京麻布新堀町八番地　學農社雜誌局

詩文和歌添削

添删專主叮嚀親切使初學者容易熟錬○潤筆料隨意且諸郵券代用○即日返稿但郵税自辨

大坂東區内久寶寺町二丁目八番地高橋方　皆山閣

廣告

來ル十九日二十日二十一日（午前十時ヨリ午後五時マデ）内山下町鹿鳴館ニ於テ當婦人慈善會第二次出品會相開候間入場券御所持ノ御方ハ可相成御繰合ヲ以テ當日御來場出品御購求被成下度此段豫メ懇請仕候也

明治十八年十一月　婦人慈善會

詩文添削

詳細本誌三號ニアリ　東京麻布谷町卅八番地　梅花吟盧

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　萬春堂

持主兼印刷人　大庭宗吉

編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區雉子町	團々社
同　日本橋區新葭町	良明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同　京橋區木挽町一丁目	萬字堂
同　京橋區銀座二丁目	山口福松
同　牛込區肴町	活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目	石版社
岐阜縣美濃國笹土居町	星菱書房
越後國長岡	大橋書房
大坂備後町四丁目	岡島支店
大坂西區江戸堀南通一丁目	旭香舍

東京神田區淡路町　大賣捌　巖々堂